

狂乱廿四孝

北森鴻



第六回 鮎川哲也賞受賞作

北森鴻

【第八回鮎川哲也賞受賞作】

東京創元

狂
野
山
花
廿
四
孝



きょうらんにじゅうしこう
孝 四 廿 乱 狂



一九九五年九月二十日 初版

著 者

北 森 きた もり

鴻 こう

発 行 者

平 松 一 郎

発 行 所

株式会社 東京創元社

東京都新宿区新小川町一―五
郵便番号一六二

電話〇三(三三六八)八三三(代)
振替〇〇一六〇―九一―一五六五

製 版

フ オ レ ス ト

印 刷

徳 沢 印 刷

製 本

鈴 木 製 本

乱丁、落丁本はご面倒ですが小社までご送付ください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

狂きょう乱らん廿にじゅう四し孝こう

登場人物

かわなべきようさい

河鍋狂斎

さわむらた の すけ き のくにや
澤村田之助（紀伊国屋）

さわむらとつしよう

澤村訥升

もりた かんや

守田勘弥

かわたけしんしち き すい

河竹新七（其水）

は せ がわかんべ え

長谷川勘兵衛

とめきち

留吉

たつみ や じ へ え

辰巳屋治兵衛

みね

峯

ぎんべい

銀平

か な がきろ ぶん

仮名垣魯文

か くちい ぶ あん

加倉井燕庵

み な せ げんざぶろう

水無瀬源三郎

おの えきくご ろう おとわ や

尾上菊五郎（音羽屋）

かわら ぎきごんの すけ やまざきや

河原崎権之助（山崎屋）

画家

守田座の立女形

田之助の兄

守田座の座主

守田座の座付き作者

大道具師

勘兵衛の弟子

蠟燭問屋

治兵衛の娘

根岸の寮の番人

戯作者

医者

市中見回り、元南町奉行所同心

役者

役者

プロローグ 一九九四年五月・東京

私は一枚の絵である。物言わぬ絵である。

ここは東京都墨田区にある、江戸東京博物館のメイン展示室だ。多くの仲間と同様、今は装丁にしっかりとつなぎ止められて、展示会場のケースの中から通り過ぎる人の列をぼんやりと眺めている。

この場所は、展示会場の順路から見ればかなり後半にあたる。私の前にやってくる人の足はすでに広すぎる展示会場に疲れていて、その視線はどことなく投げ遣りに見える。

だが……。

私はささやかな好奇心をもって見ている。多くの人が疲れた足取りで私の前にやってきて、その動きが一瞬止るのを。驚きの度合いに応じて見開かれる瞳の具合と、飲み込まれた呼吸の数を。私は幽霊画である。

人は私の前で言葉を失い、意識を奪われたようにただ立ちすくむ。それは、生みの親である一人の絵師が、私に与えた使命であり能力なのだ。描かれた幽霊は瘦せた老婆のものである。だらしなくはだけられた胸元から、一本、二本と数を数えられそうな肋骨が浮いている。

左手足元には、行灯^{あんどん}がひとつ。けれどその光はあまりにもささやかで、周囲を照らすには光の量が絶対的に足りない。もっともそのような状態だからこそ、幽霊が存在しうると言えばそれまでだ。

老婆の幽霊は笑っている。癒^いしようのない恨みを全身から溢れさせながら、なおもその目はかすかに笑っているのだ。顔から袈裟^{けさ}がけに、押し寄せる勢いの闇がべつたりと張りついている。そのために光を帯びた左の瞳と、闇を受けとめた右の瞳では違った色に塗り分けられている。その不安定さ、不気味さが、私の前を過ぎようとする人の足を止めるのかもしれない。いずれにせよ、生みの親が持つ技量は、私自身に遺憾なく発揮されていると言っている。

長く世の中を見ていると、いろいろな智慧がつくものだ。ある日私を見た精神科医師がこのようなことを喋っていたのを思い出す。

「相応に不安定な精神を持つクランケだね。思いつめた目をしている。これは笑っているのではないよ。ただ顔の筋肉を自由にコントロールできなくなっているだけの話だ。

こうした症例を『境界線上』と呼ぶことがある。

大きな病におかされ、人生に絶望すると、その反動が外に向く場合があるんだ。そうしたクランケの表情によく似ている。うん、ここまで似ていると、むしろ境界線上にいると言うよりは、鬱病と診断して間違いないだろう。

ある日突然、自分の不幸と他人の幸福が許せなくなるんだね。症状としては自分を傷つけようとするものが現われたり、陥れようとする声が聞こえたりという、被害妄想がたびたび出るようになる。やがて自分を傷つけるか他人を傷つけるかしなければならぬ所まで追い詰められるん

だ。多分、こうした症状で精神を病むということは心の中に刃を育てるのかもしれないね。自分を含めた誰かを傷つける以外に、納めようのない刃をね」

もう何十年も前に、精神科医は幽霊画をこう分析してみせた。それは半分あっている。だが半分までだ。

私に描かれた幽霊画の目がなぜ笑っているのか、ほかにもその意味を説明しようとした人間が幾人かいるが、いずれも真実には程遠いところで足踏みしている。

私は、これまた多くの仲間同様に、言葉を語る器官を持たぬ静物である。だがしかし、それは私が言葉を持たぬということではない。

私は言葉を持っている。生みの親が与えてくれたのだ。だがその言葉はすべての耳に届くものではない。ささやきに耳を澄ませ、時間の流れに消えた情景をいくつかの真実から凝視することのできる者だけが、この声を聞く権利を持つ。生みの親が、私に与えた宿命のようなものかもしれない。

生みの親は河鍋^{かわなべ}狂斎^{きやうさい}という。生まれは天保二年^{てんぽう}（一八三一）、下総^{しもとう}古河^{こが}の在の下級武士の家に生まれ、四歳ですでに画才を示して歌川^{うたがわ}派の、後に狩野^{かのう}派の門を叩いている。だが、旧来の手法を踏襲することばかりに専念する派閥に愛想を尽かし、狂画の世界に足を踏み入れて遂に破門同然となった。以後、狂斎は持ち前の好奇心と痴氣に任せ、幕末から明治にかけての激動の時代を、絵筆の勢いに任せて活写していく。

私が描かれたのは明治三年のことだ。

おや、一人の男が前で立ち止った。男は首を傾げて、こちらをじっと見ている。私の足元に付

けられた解説の札を眺め、そしてまた私を見る。

私も男を見る。この男をどこか他の場所、他の時代で見なかっただろうか。

(そういえば)

確かに私はこの男を知っている。もしかしたら、この男は私の声を聞く権利を有する男なのだろうか。ならば私は男の脳に向かって、長い物語を送らなければならない。思い出すだけで憂鬱になりそう、あの年に起きた一連の事件について。男がメッセージを正確に受け取るために……。

(1)

十月五日。守田座^{もりたざ}の芝居の初日。

チヨーン、チヨーンと二丁の直しの柝（拍子木）が鳴る前から、場内は異常な盛り上がり方だつた。

「田之太夫^{たのたう}が八重垣姫^{やえがきひめ}の公演とあつちやあ、見ねえですませば轟頂^{ひいき}の名折れだぜ」

「いやさまったく。あの惚れられするような艶姿^{あやふた}をもう一度見られるたあ、江戸っ子冥利に尽きるというもんだ」

「ええい、それにしても焦れ^じつたいたら、ありやしない。早く幕を開けちまえばいい。アタシなんざ一刻も前からこうして、涙を拭くための手拭いを握り締めてるつてのに！」

舞台正面の柝席、花道横の端席、上下の棧敷、末席に至るまで、観客がびっしりと詰まっている。弁当売り、煮花の売り子が座敷を回ろうとしても、それがままならないほどの盛況ぶりだ。

お峯^{おみね}はこの様子をじっと見ていた。身銭をきつての入場ではないから、舞台の一番後ろからこつそりと覗いている。

小屋内の熱気とは裏腹にお峯の目は冷やかだ。いつになくねつとりと熱い雰囲気、そして時折閉まつたままの幕に寄せられる視線には、あからさまな好奇心が含まれていることを、十六歳の少女は敏感に読み取っている。

（見ておいで、田之太夫はあんた達の肝を三尺も抜いてみせるから！）

澤村田之助^{さわむらのすけ}。その名前を知らぬ女が、この江戸（今でも東京なんて名前で呼ぶものはこの猿若^{さるわか}町にはあまりいない）にいったいどれくらいいるのだろうか。わずか十六歳で守田座の立女形にまでのぼりつめた、天才役者だ。面の良さ、凛々と舞台に響き渡る口跡の良さに加えて、甘い凄みを備えた睨みが、どれほどの乙女の胸をかきむしったことか。すでに十代で役者の頂点を極めた田之助は、

「舞いのあでやかさは天にも通ず」

とまで言われたほどだ。ところが神も仏も、実際のところはこの天才役者をあまり愛さなかったのかもしれない。あまりに美しい生き物は、かえってその怒りを買ったようだ。『紅皿欠皿^{べにざらかけら}』の舞台で受けた小さな傷が元で、田之助は右足に脱疽^{だっそう}を患ってしまった。誰もが気にも留めなかった踝^{くるもじ}の傷が、数ヶ月後には退^ひ引きならない悪意となつて彼の舞台生命を脅かした。

役者は顔が命とは言いが、舞台を勤めることを考えたらむしろ「命」は足の方に重く、濃くもっているのではないか。足をなくすことは役者として致命傷に等しい。散々「切るの、切らないの」で焦れた挙げ句、横浜の医師、ヘボンに膝上から切斷されたのが、慶応四年。

実はお峯は、五体健全なころの田之助を知らない。はじめてその舞台を見たのは、江戸に官軍が攻めてきて、あつという間の戦いが終わって「明治」とやら言う新しい時代が、唐突に始まつた年の五月のことだ。

当時十四歳だったお峯には、世の中がどう転んで、どう変わったのだから、分別がつくはずもない。だが世紀末じみた胡散臭^{うさんくさ}さ、荒廃のきな臭さは、少女にもはっきりとわかった。そのころからだ、お峯がしきりと父親、母親に、

「芝居を見に行きたい」

とせがむようになったのは。母親は「まだ早い」といい顔をしなかったが、三代続いた蠟燭問屋「辰巳屋」の主である父親は、

「この子も、驚天動地の世を肌で感じているんだ。大人の私たちでさえ、見えないこれから先のアレコレに、お峯の小さな胸が脅えて痛まないわけがない。ナニどこかに逃げ込みたいのだ、それには芝居小屋が一番だ」

と優しく笑って、暇を見ては店のものをお供に付け、お峯が小屋に通うことを許してくれた。もつとも、それが高じて一年前、

「あたしは狂言作者になりたい！」

なんぞと言いだすとは、夢にも思わなかったろうが。

その、はじめてみた舞台の衝撃をお峯はまだはつきりと覚えている。田之助が客演する市村座の五月の演目は「里見八犬伝」「大晏寺堤」「伊勢音頭恋寝刃」の三つ。大晏寺で、敵持つ身の春藤次郎右衛門を演じた田之助の右足は、すでに主人とは永遠の別れを済せていた。立役（男役）ながら、役自体が足の萎えた侍だけに田之助にはうってつけだったのだろう。

（あの日もやはり、観客の目は珍しいもの、そう田之助太夫がどんな役を見せてくれるのか、今日と同じ目をしてみていたんだ）

舞台は寺の裏手にある墓場。三年の旅生活ですっかり窠れ、足まで患った春藤は、弟を薬を買いにやらせる。孤独を噛みしめるうちに、手にした名刀、青江下坂で松の枝を抜きうちに切り落とし、

「まだ手の内こそは狂わぬ……これで足が立てば申し分もない」

という台詞を透き通る声で言うのを聞いて、お峯は経験したことのない心の震えを感じた。間をひとつ外せば、笑い話にしかならぬ榮屋落ちだ。それを、田之助の全身から吹き上がる哀れさ、悲しさが笑いを許さない。

鼻の奥にツンときな臭いものを感じ、ああそうか、私は今、泣いているんだ、と気がついたのはしばらくたってからのことだ。薄暗い舞台で、田之助の周りにだけ、不思議な光が満ちているように感じた。それが客席から集中する、若い女たちの視線によるものだということがわかったのは、しばらく小屋に通いつめ、お峯自身が同じ視線を放っていることに気がついてからだ。

あれから二年以上がたつ。片足を切ってしまうこと自体、役者としては十分な不幸だということに、澤村田之助を襲った運命の残酷さはまだまだ序の口であつたことが、この二年ではつきりとした。

最初の執刀の際に「すでに手遅れかもしれぬ。このまま手術が成功したところで、再び病魔が目覚める可能性が極めて高い」という、医師、へボンの不気味な予言は、わずか一年あまりで現実のものとなつてしまった。

明治二年九月。再びへボンの手によつて、田之助、今度は左足を膝下から切断。

「澤村田之助は終わった。もういけない」

そう感じたのは、鼯^{ひじき}筋ばかりではなかつたはずだ。市村座、中村座^{なかむらざ}、守田座の、いわゆる「猿若町三座」の各座元（経営者）もまた、同じことを考えたに違いない。あとはいかにして華やかな引退興行を、

（自分の小屋で、少しでも長く勤めさせるか）

を考えるばかりだった。中でも熱心だったのは、守田座の座主・守田勘弥^{かんや}である。田之助が守

田座の立女形であることを考えれば当然で、周辺の座主がその方向に話を合わせようとしていた。だが、病魔が周囲の期待を裏切り続けたように、田之助もまた鼻肩筋、小屋関係者の期待を小気味よく裏切ってくれた。すでに小屋に出入りしていたお峯は、そのときのことを良く覚えていた。

澤村田之助と言う役者は、

「さて太夫、引きの興行のことだが」

と座元たちが話しかけるのへ、

「引きの興行とは誰のだい？ あたしやまだやるよ」

とひと言、これですべての目論見をひっくり返してしまった。

「それは願ってもないことだが太夫、両足もないじゃ……」

守田勘弥の目は、暗に『役者は無理』だと言っていた。

「足がないがどうした、いつから芝居の本（脚本）はそれほど狭いものになったんだ。世に洗ざらいの本をすべてひっくり返して、それでもあたしのやる役が見つからないならフン、其水んところで新作を書かせればよいだけのことさね」

朱塗りの七寸長煙管片手に平然と言いつつ田之助に、その瞬間お峯は感動にも似た恋慕を抱くようになった。

（この人の我がままは、人を引きつける我がままだ。人は田之太夫を中心に、回ったり、絡まったり、走ったりするんだ）

田之助が「其水」と呼び捨てにしたのは、守田座の座付き作者、河竹新七（後の黙阿弥）のことだ。守田座ばかりでなく、猿若町全体が彼の新作で成り立っているところが少なからずある。町を一間歩くだけで、四方八方から「オヤ、其水師匠、どちらへ？」と声がかかるのは、街全体

に彼が愛されている証しだ。間違つても呼び捨てにしていゝ名前ではない。

澤村田之助とはそれができる役者であり、また許される役者なのだ。

昔のことをあれこれ思い出すうちに、いつの間にか幕が上がった。

『廿四孝』は武田軍記の後日談として今も人気の高い芝居である。武田氏滅亡の後、信玄の遺児である勝頼は花作りの若者に姿を変え、長尾景虎の屋敷にすんでいる。ところが同じ屋敷には勝頼が死んだものと思ひ、ひたすら回向につとめる許婚者、八重垣姫がいる。

やがて出会つてしまふ二人。

許婚者そっくりの若者を見て、一瞬の恋に陥る八重垣姫。

そこに長尾景虎の思惑が絡んで、八重垣姫の一途な思ひが頂点に達したとき、奇跡が起きるといふ伝奇活劇である。

八重垣姫と勝頼の出会いをはじめとして、屋敷の中でのやりとりを示す十種香の場、勝頼恋しさの氣持ちが奇跡を起こす奥庭の場という二場構成。ことに奥庭の場は「狐火の場」とも呼ばれて、八重垣姫の美しさ、いじらしさが全面に引き立てられる。

幕開けは屋敷の中。

舞台の八重垣姫（田之助）は、座つたままの姿だ。首の付け根からストンと両の腕を切り落としたような肩の細さは、生身の女よりもはるかに女らしい。なにより目だ。足などなくても、

「澤村田之助は目と声、そして指の動きで娘心を刺す」

と言われるように、田之助が台詞をひとつ吐けば胸の奥に寒氣を呼ぶし、まして目線と目線がかち合おうものなら、並みの娘の心の臓は破裂してしまふのにちがいない。

勝頼の身代わりとして自害した若者の許嫁、濡衣ぬれぎぬとのやりとり。今は簑作みのさくと名前を変えているために、名乗りを上げられぬ勝頼のもどかしさ。

台詞と台詞を淨瑠璃方の音曲が繋ぎ、物語は進んでゆく。

台詞に泣かされ、姿のあでやかさに酔わされているはずの観客の中に、冷やかな目があるのを、お峯は感じた。

（田之太夫に失望しはじめているんだ）

と思った。恐ろしいことだが、事実には違いない。両足をなくしてもやれる役はいくらもある。

演出をちよつと変えるだけで、数はまだまだ増えるだろう。だがそれは田之助の持つ役（芸の幅）が広がるのではなく、ただ単に役を田之助に合わせて仕立て直すだけの話だ。

五月の公演では『碁ご太平記たいへい白石しろいし噺ばなし』の宮城野役みやぎの、六月公演では『明烏夢あけがらすゆめの泡雪あわゆき』の浦里役を演じた。いずれも座ったままで演じられる役だ。続く八月の『狭間軍記』では立役の三浦左馬之助、このときは馬に乗っての芝居だから、やはり足はいらない。久々に「動く田之助」を見て観客は熱狂したが、それとても長くは続かなかった。

「いずれ田之助は潰れてしまう。潰れぬまでも先細るばかりだ」

との声は、言葉にならない波となって次第に大きくなってあからさまに小屋へも届くようになっていった。

そしてこの十月公演。田之助が、八重垣姫の役に挑戦するのを知って人々は驚いた。八重垣姫ははじめの場こそ座り姿が多いが、筋が進むに連れて舞台を歩き回る、立つ、座るといった所作が増えてゆく。

澤村田之助は、この役をどのように演じるつもりなのか。

だが、舞台が進んでも、田之助は動こうとはしない。上半身を巧みに動かして変化を付けているが、やはり下半身はひとつ所に定まったままだ。

お峯が鋭く感じ取った失望感は、水面に広がる波紋のように観客の間に伝播していく。

（やはり足がなくてはどうにもならねえ）

痛ましさと腹立たしさが、目線の鋭さとなって舞台に集中したところにもつてきて奇跡が起った。芝居の中の筋ではない。正真正銘の奇跡だ。

八重垣姫が立ち上がったのである。そのまま高二重の舞台の端まで進み、振り返って今度は中央に戻ってきた。芝居の所作というよりは、ポカンと口を開けた観客に向かつて、

「田之助が舞台に戻ってまいりました！ これからも御愛顧のほどよろしくお願いしまする」という無言の口上のようなうだ。呼吸をいくつする間が過ぎたろう。場内には寂として声もない。

『ヤア、なんといいやる。諏訪の法性の御甲を盗み出せと言いやるからは、さてはあなたが勝頼様』

へいう顔つれづれ打ち守り、許嫁ばかりにて枕かわさぬ妹背仲。お乞みは無理ならねど、同じ羽色の鳥翹。人目に夫とわからねど、親と呼びまたつま鳥と呼ぶは生ある習いぞや。いかに顔が似たればとて、恋しと思う勝頼様、抑見紛ごうてあらりようか。

浄瑠璃方の音曲に、八重垣姫の台詞が重なって、せつなさの中に姫の激しい心情が吐露される。